

清水さやか 「マフードの涙：『名づけえぬもの』における主観性の臨界点」

『名づけえぬもの』の語り手は、しばしば自分の目から涙が流れ出ていることを報告する。しかし、なぜ彼は涙を流す（あるいは、そう語る）必要があるのか。本発表では、この「涙」、そして「泣く」という、本来は主体の感情の昂ぶりにより引き起こされるはずの身体反応に注目し、「涙」をめぐる文学的想像力を展開させることで、本作においてベケットがいかにして主観性の臨界という主題に切り込んでいるかという点に光を当てたい。

鈴木哲平 「詩人ベケットとフランス詩の翻訳

——ランボー、ツァラ、エリュアールと『こだまの骨』をめぐって——」

詩集『こだまの骨』を出版した1930年代は、詩がベケットにとって重要な表現ジャンルであった時期だが、この時期はまた彼がフランス語の詩人たちを翻訳した時期でもあった。T. S.エリオットら英語で書くモダニズム詩人たちにとって、フランス象徴詩は重要な詩的源泉であったが、1900年代生まれのベケットやデニス・デヴリンらアイルランドの「レイト・モダニスト」たちにとってもフランス詩は重要な存在であり、また1920年代のモダニストたち以上に、翻訳そのものが彼らの活動において重要な位置を占めている。

本発表ではとくに、ベケットのランボー、ツァラ、エリュアールの翻訳を素材に、これらフランス詩人たちをベケットがいかに読んだか、そしてこの読解をいかに自作『こだまの骨』に生かしたか、考えてみたい。